

逃げる

大石 雄鬼

輝の手を人形のやうに置く
カーブミラーに止まつてゐたり焼蕎屋
恋猫が佃島より逃げてくる
印籠に野遊の絵のふくれをり
花衣すとんと体より落ちる
鞆に足の溺れてゐたりけり
ゆく春を睫毛の多き人とゐる
リンカーンは髯の輪郭朴咲ける

伝書鳩新樹の森へ降りられず
駅ビルの奥に売られてをりし繭
虹立ちてサーカス団員動かざる
夏風邪を火災探知機見てすごす
青柿の瞼を閉ぢてゐるところ
放火魔の話のなかを藪蚊過ぐ
クローラーが鱗をうごかし理髪店
天道虫防弾ガラス下りてくる
鳩の爪黒ずみ祭囃子かな
二の腕に虹のかかりし水族館
木下闇からだを拭けば赤くなり

玉葱に笑窪のありて腐りたる
夏障子破れて森が見えてをり
背に点字浮かんでをりし墓
雑巾をめくれば蟻の列があり
紙コップより逃げだせず兜虫
螢狩してきし膝に汚れあり
仙人の顔にぶつかるまでは蟆子
築に魚夢よりこぼれ落ちてきし
夏痩せを気球の影のとほりすぐ
ヘアピンが髪に埋もれる原爆忌
谷底のやうなベッドや鶉来る

《受賞のことは》

悲しい詩

大石 雄鬼

中学生の頃、国語の授業で詩の鑑賞があった。何という詩かうろ覚えだが、鹿が立っていた記憶があるので村野四郎の「鹿」であったと思う。教師に感想を問われ、私は銃に狙われている鹿を詩った「悲しい詩である」というようなことを答えた。すると教師の顔が一瞬曇り、「そういう見方もありますね」と言いながら他の生徒に意見を求めた。どうやら求められた回答は、生命の凜とした美しさであるらしかった。そのとき以来、私は詩など理解できない人間だと思ってきた。

それから十数年後、河内酔魚さん（現在「炎環」同人）と職場で隣合わせになったという偶然から俳句を始め、田川飛旅子先生の下でさらに十二年が経った。そして今回、新人賞という栄えある賞を戴いたが、あの中学生のときの思いは消えてはいない。自分と他の人との感覚のずれをいつも意識している。

どうも私は、俳句においても悲しみというマイナスのイメージがいつも先行するようである。私が好きな俳句には、そこに負のイメージを感じとっている場合が多い。もちろん俳句にしても詩にしても、喜びと悲しみはいつも同時に同居しているようである。またそうあるべきだとも思っている。私としては悲しみを感して作った俳句が、周りにはユーモアとか滑稽と映ることが結構多いらしい。自分と他の人との感覚のずれ。このずれが大きければ当然他の人に理解してもらえないが、多少のずれは個性という点で俳句に不可欠であると自らを慰めている。

現在、このずれが私の作句上の原動力でもあるが、同時に自分の俳句を客観視できないという弱みにもなっている。だから、句会へ多く出かけることを心掛けてきた。他の人の目を通してずれを修正し、そういう方々のおかげでなんとかここまで来ることができたと思っている。「陸」「藍生」をはじめ、「十人会」「豆の木句会」でご指導頂いた方々、また選考委員の先生方に深く感謝申し上げます。

《略歴》

大石雄鬼（本名正雄）

昭和三十三年七月三十一日生まれ。

三十八歳。

埼玉県浦和市出身。団体職員。

二十六歳から俳句を始め、すぐに「陸」入

会。二年後同人、現在編集員。また「藍生」

に創刊時から入会。昭和六十三年埼玉文学

賞俳句部門準賞。平成五年現代俳句協会新

人賞佳作。現代俳句協会会員。

現住所 埼玉県浦和市白鷺三一四一六

（「現代俳句」十二月号より転載）